熊野町文化誌

郷

熊野町教育委員会

はじめに

論語の一説に「温故知新」という孔子の言葉があります。故きを温めて新しきを知る。即ち歴史を深く探求することを通して現代への認識を深めていく態度が必要だという意味かも知れません。

この度、熊野町郷土史研究会のみなさまのご協力によって作成されました熊野町文化誌『郷』はまさに「温故知新」の言葉にあてはまる貴重な郷土文化であるといっても過言ではありません。

「郷土の文化財の美」「熊野筆の文化」「郷土の町並みと生活」の三分野から構成され写真を多く取り入れられ史実に基づいて小中学生にも読めるようにふり仮名も入れて頂いております。

世はまさに国際化情報化の時代でありますが、我が国の我が郷土の文化、歴史を知ることが国際化の原点とも言われています。

先人が汗水流して築きあげられた偉大な熊野町の足跡がここに再現され後世に残されることは、誠に価値あるものと考えます。

「不易と流行」という言葉がありますが、何百年経っても変えてはならないものを今一度見つめ直し熊野町が益々発展するよう念じております。

この文化誌作成に多大なご協力ご指導を賜りました熊野町郷土史研究会・文化誌選定委員の皆さま、また、貴重な資料をこころよく提供頂きました関係者の皆さまに衷心より感謝を申し上げます。

平成十四年（二〇〇二）十一月

熊野町教育委員会

教育長　西　原　忠　徳

目次

郷土の文化財の美

榊山神社の本殿　2
榊森神社の狛犬　4
鬼　瓦　6
石斧・矢じり　8
光教坊の鐘楼　10
榊山神社神楽踊り　12
西光寺の象の彫刻門　14
涙　岩　16
ゆるぎ岩と磨崖仏　18

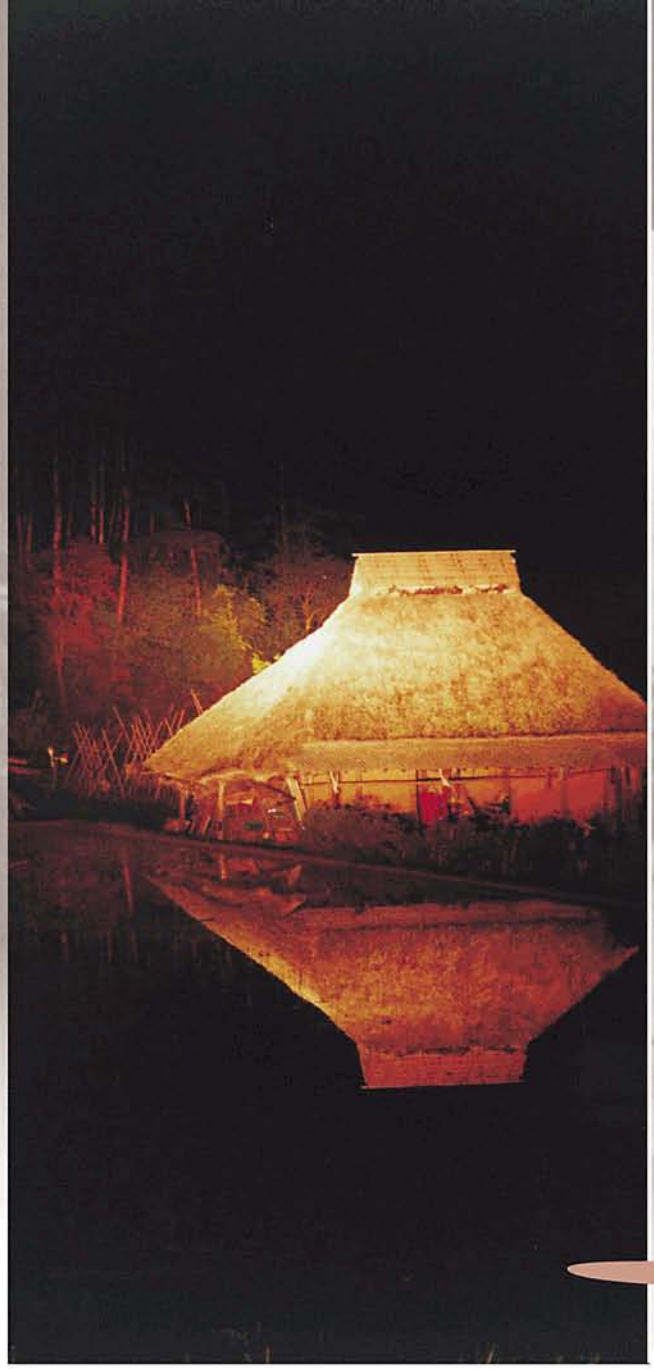
熊野筆の文化

大宮八幡宮の石段・玉垣　22
郷土館の看板　24
古文書（通行手形）　26
筆の道具と技（伝統工芸士）　28
工場制手工業（マニュファクチュア）　31
熊野七筆会　34
筆まつり唄　36
熊野筆の歴史年表　38

郷土の町並みと生活

郷土館の農具　48
上深原の農家　50
熊野の池　52
熊野の古い道　54
中溝通り　56
旧熊野郵便局　58
熊野の繁華街　62
熊野の庭　64
朝のあいさつ　66
十三日講　68

文化財絵地図　70



郷土の文化財の「美」

美

彫刻

榊山神社の本殿

この神社は承平三年（九三三）宇佐八幡宮より勧請された古社と伝えられています。正徳五年（一七一五）火災にあい伝来の宝物や古文書などを焼失してしまいました。そのために詳しい縁起を知ることはできません。現在の本殿は江戸時代中期の第五代藩主吉長の許可を得て三年の歳月をかけて上棟したものです。拝殿は慶応四年（一八六八）斧始式を行い、明治三年（一八七〇）竣工を見ることができました。

この神社の本殿は町の重要文化財に指定され、近世寺社建築の初期例として貴重な建築物です。「文化財のしおり」には、「本殿は三間社流造りの銅板ぶきで、建物の大きさは通常の神社建築の二・六倍の面積と四倍の体積を持つ、わが国でも最大級の規模を誇る秀麗な建築物です。また、外陣の竜の彫刻や、内陣の欄干に彫られた菊と鳳凰に見られるように装飾も華麗です。」と記述されています。たしかに本殿に見る建築は、下賀茂神社を典型とする流造りでありスマートさがあります。しかも桃山文化の豪華絢爛とした装飾の名残があります。これはこの神社の造営に携わった宮大工鳥居甚兵衛の影響が大きく左右しているのでしょう。彼は東高屋の福岡八幡宮本殿の造営に関わっています。宮大工の一団は大坂の八幡宮の建築に桃山文化の彫刻や装飾を施したのでした。

この本殿の建築は、熊野の財政の豊かさを秘めています。これだけの建築をする費用はすべて農民の肩にかかるのですから、生活にゆとりがなければできない相談です。この財政を支えた経済力を解明すれば、さらに熊野の歴史に新しい発展があるでしょう。この本殿の建築により、享保の熊野の文化は新興農民の独自な文化をつくりあげる様子が明かなっていくのではないかと思われます。

榊森神社での
祭りの風景

榊森神社

榊森神社の狛犬

この榊森神社は大同二年（八〇七）に小社の建立が伝えられていて、熊野町で最古の神社と言えましょう。

この神社は、古代には大多山の麓（小田山）に鎮座されていたと伝えられています。その後にこの地方を治めていた城主、高根某が氏神社としていましたが、榊森城が落城したあとは、宮林に移転し、さらにこの境内が狭くて不便だったので今の新宮区宮の前に移遷しました。

この神社には「湯立の儀式」が残っています。この儀式は大釜の熱湯を「どじょう」の入った桶の中に注ぎ、神に奉献すると共に湯滴を宮司によって振り掛けられた者がお祓いをうけるいわゆる「どじょう祭」です。この湯祓いは、一般には、川魚を献上したものですが、この地では特に「どじょう」をもって、それに代えたのでしょう。この湯滴のかかった人は無病息災、家内安全、商売繁盛の願いがかなえられるという伝統の信仰に支えられて生活したのでしょう。この榊森神社には魔除けとして狛犬が安置されています。熊野町指定重要文化財の第一号指定の彫刻物です。狛犬の起源はインドともペルシャとも言われていますが、定かではありません。いつ日本に伝来したのかはっきりしていません。

榊森神社の一対の狛犬は、「文化財のしおり」に書かれているように、木彫寄木造りに彩色が施されており、室町時代後期の作品と推定されています。高さは四〇センチほどの小さい作品で無銘ですが、価値ある彫刻物であることは一目で分かります。

この神社を通して、この地方が古代から重要な役割を果たしていたことが推測され、さらに調査研究が望まれます。

鬼瓦の右側面
頭部に刻まれた名前

郷土館前庭に設置されている鬼瓦

鬼瓦

郷土館の前庭に高さ二・五メートル、幅三・二メートルの巨大な鬼瓦が置かれています。この瓦は、平成五年（一九九三）光教坊大修理の時に本堂の屋根から降ろされたものです。対になっているあとの一つは、光教坊の庭に置かれています。

この鬼瓦は「江波焼瓦」であることがわかりました。この「江波焼瓦」は、幻の瓦といわれ、作られたことは古文書で分かっていましたが、その実物は見つかりませんでした。これが熊野町で見つかったのです。当時の新聞記事は、この「江波焼の鬼瓦」のことを大きく取り上げています。

文政十二年（一八二九）浅野藩が国産奨励による藩営事業の一環として舟入、吉浦、江波の三カ所に瓦焼の窯所を設置しました。その中のひとつです。この時期には浅野藩の財政も逼迫していて、農家にもいろいろの産業を奨励する申し渡しの回状が庄屋などに送られています。

この鬼瓦の左側には製造年月日が刻まれ「天保三年五月」に藩に納めたと書かれています。そして、右側には「沼田郡江波村瓦場所」と三人の職人の名前が刻まれています。この時代の建築物・製造物には必ずそれを製作した職人の名前が記入されています。これはその製造物に対する責任を明らかにすると同時に作られた作品に職人の誇りがあったからでしょう。この鬼瓦によって、江戸時代の「江波焼窯所」の存在が立証され、「江波焼瓦」が確認されたのは、意義深いことです。

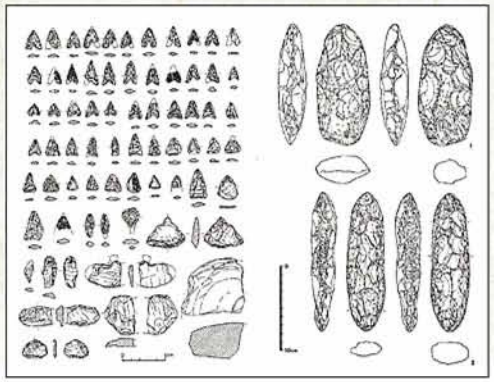
郷土館の前庭に足を止めて、この鬼瓦を眺めると、約一五〇年前の江戸時代の瓦職人の腕前の凄さに深い感動をおぼえます。

中国新聞掲載記事より

石斧・矢じり

新宮の東深原遺跡は、東広島市の西ガガラ遺跡と共に県内でも旧石器時代の遺跡として有名です。深原は明治時代以前は、「コウラ」と呼ばれていたそうです。ある学者によると「コウラはアイヌ語ではないか。」とのことですが、確かなことは分かりません。この付近には「ガガラ」・「コウラ」・「ハグイ」・「イラスケ」などその語源がどこから来たのか不明の地名が多くあります。もしこの地名の語源がはっきりすれば太古の言語が解明されるでしょう。

この遺跡は昭和五三年（一九七八）頃、植栽のために丘陵斜面を掘り下げていますと、地表より五〇センチほど下から、石斧二個が並んだようになって出土してきました。「石斧の長さは十四・五センチで流紋岩製でした。この石の局部を磨き造られた石斧でこれを「局部磨製石斧」と言います。広島県では類例が少なくて旧石器時代末期（一五〇〇〇～一〇〇〇〇年前）の頃と推定されます。



出土品の図

この石器から、熊野の土地に旧石器時代から古代人が生活を営んでいたことが分かります。

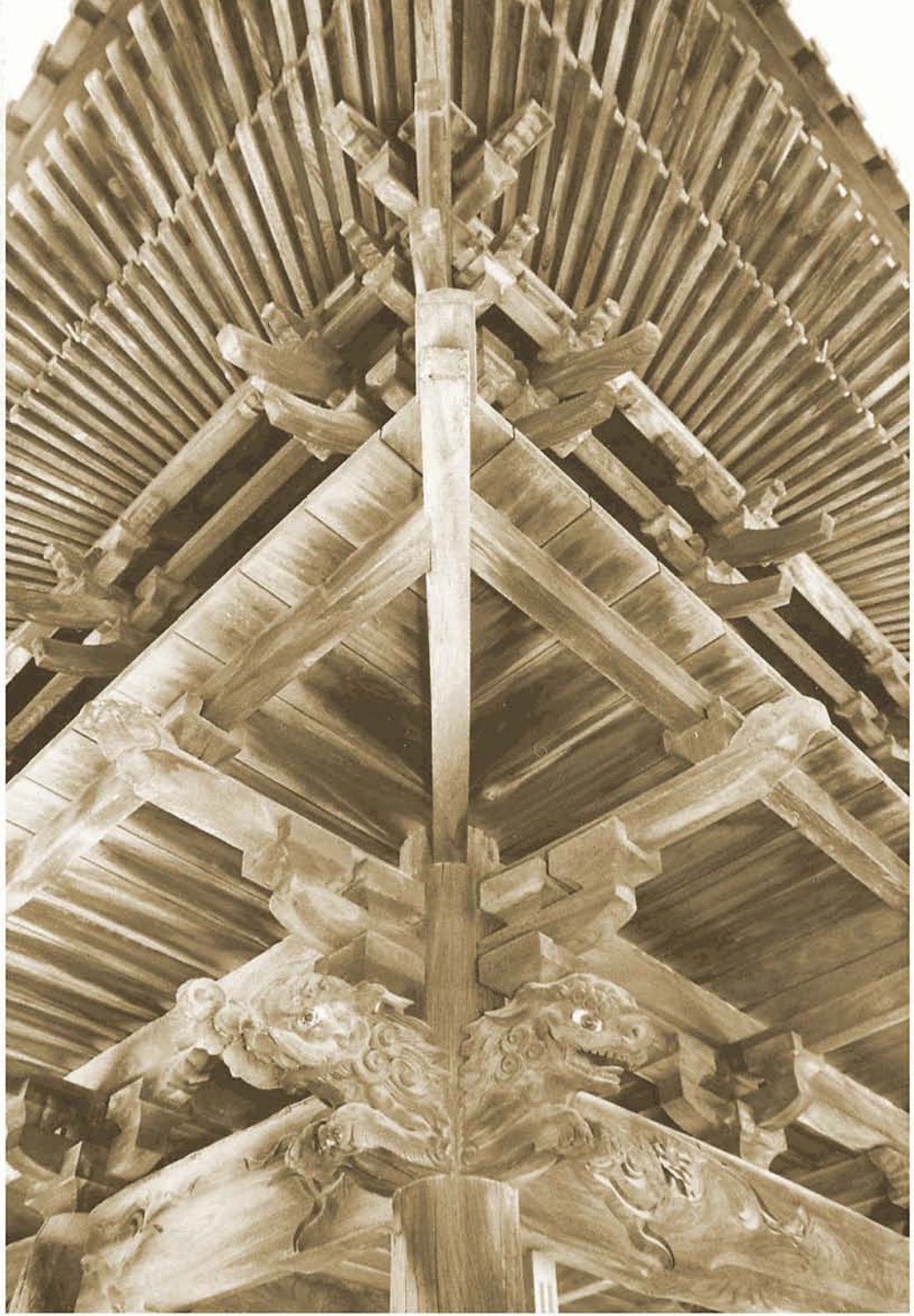
また、平谷停留所からすぐ近くの丘陵地の畠の中に柳ノ本遺跡があります。平成三年（一九九一）試掘されて、縄文時代と思われる多数の石器群が採集されました。出土の遺物は、土器約三十点・石器約二八〇点です。土器は細片が多くて文様などはよく分かりませんが、縄文土器のほか、中世土器なども含まれていました。

出土品

石器には石の矢じり、ナイフとして使用するスクレーパーという刃器、動物の皮を剥ぐための剥片石、礫などが出てきました。この石器の石材は、安山岩・黒曜石・水晶などですが、安山岩は四国香川県五色台産、広島・山口県境の冠山産と言われています。また黒曜石は島根県隠岐島久見、大分県姫島産と言われています。こうして石器一つからも、縄文人が瀬戸内海を利用して、四国や九州地方との遠隔地交易がかなり盛んに行われていたことをうかがわせます。この他に遺跡は、各地区から見つかっています。上に熊野町埋蔵文化財分布表を掲載します。

熊野町埋蔵文化財分布表（平成4年3月まで）

番号	地区	遺跡名	時代	出土器
1	平谷	柳ノ本	縄文	石鏃(黒曜石・安山岩)、剥片多数(黒曜石・安山岩)
2	川角	貴船	中世	中世・近世土器片
3		上ノ山	弥生～	石鏃(安山岩)、弥生・中世・近世土器
4		木綿地	弥生～	黒曜石剥片、中世・近世土器、亀山焼土器片
5	出来	地蔵の前	弥生	石鏃(安山岩)、安山岩剥片、弥生土器
6		中筋①	弥生～	弥生時代後期土器、中世・近世土器
7		中筋②	弥生～	弥生時代後期土器、中世・近世土器
8		大水南地	弥生	弥生中期土器、住居跡
9	呉地	八幡風呂	弥生	弥生後期土器
10		上明	弥生～中世	石鏃(安山岩)、安山岩剥片、弥生～中世土器
11		人夫台	縄文	石鏃(安山岩)
12		台	中世	中世・近世土師質土器、亀山焼土器剥片
13		オノ神	旧石器・中世	有茎尖頭器、中世土師質土器
14		ハグイ原	旧石器	有茎尖頭器
15	中溝	重地①	弥生～中世	弥生～中世土器、安山岩剥片
16		重地②	弥生～古墳	石鏃(安山岩)、弥生土器、須恵器片、安山岩片
17		重地③	弥生～中世	弥生～中世土器
18		坂面大地	縄文～中世	石鏃(安山岩)、中世土師質土器
19	萩原	山ノ代①	中世	中世・近世土器
20		山ノ代②	弥生～中世	安山岩剥片、中世・近世土器
21		大原	中世	中世・近世土師質土器
22		道上	縄文～弥生	石鏃(黒曜石・安山岩・石英)剥片多数(黒曜石・安山岩)
23		里地	中世	中世・近世土器
24	城之堀	孤地	中世	土師質土器(壺)
25		稲荷台	中世	中世・近世土師質土器
26		山木地	中世	中世・近世土師質土器
27	初神	畦地	弥生～中世	安山岩剥片、中世土師質土器
28		岡	弥生	古武質土器(壺)、安山岩剥片
29	新宮	富田地	中世	中世・近世土師質土器
30		下深原	中世	中世土師質土器
31		東深原	旧石器～弥生	局部摩製石斧、摩製石斧、スリ石、凹石
32		宮林	中世	雀口付小壺、李朝小壺(石積の貴段2カ所)
33		海上側	中世	中世土師質土器



光教坊

鐘楼の内側

光教坊の鐘楼

この寺の始まりは、鎌倉幕府の執権、北条時頼の頃（一二五五）と言われています。

当時、石嶽山に真言宗石水寺が建立されましたが、それが光教坊の始まりだと言われています。光教坊の由来縁起書によりますと、

苦陽熊野村石嶽山の上に真言宗の寺があった。開基は薬師医王の霊像者であった。この寺には優れた法師の作による仏像があり、霊験新たかであった。

ある夜のこと、石水寺の僧侶が夢を見た。薬師医王の霊が深山の小川の流れの木の葉の陰に仏像の姿でいる。それを持ちかえるようにとのお告げであった。下山してそこに行って見るとお告げの通りの仏像があったのである。この仏像の霊験は日々新たかであり、善男善女が参詣して繁盛したと言う。安芸国観音霊場三十二番札所にもなっている。

このあとにも由来は続くが、その後は戦国時代に入り、天文二十一～二十三年（一五五二～一五五四）の兵乱によって菅田豊後守は滅ぼされ菩提寺だった石水寺は焼失したと書かれています。

永禄年間（一五五八）浄土真宗に改宗し、坊号を得て石嶽山光教坊となったといわれています。文化十二年（一八一五）の文化度国郡志によりますと、

西本願寺派広島光福寺末寺、石嶽山光教坊本尊
阿弥陀如来　本堂庫裏鐘楼釣鐘無銘　開基永禄年中釈浄喜　寺境内に薬師如来観音
当国三十二番之札所

などと藩に届けられています。

山門の大鐘は、明和四年（一七六七）完成し、続いて文政十年（一八二七）御堂再建天保二年（一八三一）には屋根を瓦葺きに改めています。

光教坊の鐘楼は、昔の名残りをとどめ心の安らぎを与えますが、堂内の彫刻・絵画・厨子・仏像など庭前の銀杏の大木と相まって由緒深い、荘厳な雰囲気を醸し出しています。

榊山神社神楽踊り

榊山神社所蔵の年中事物目録に「弘治二年（一五五六）丙辰八月朔日祈願に付き踊申し候」とあります。これは神楽太鼓の内側にも書かれているのです。この太鼓が今から四五〇年前に神楽踊りに使われたのではないかと推測されます。

弘治二年と言えば、毛利元就が厳島合戦で陶晴賢を破り戦国大名の地位を固めた翌年にあたります。熊野では高山城の戦いから四・五年目になり、幾多の郷民、農民の死者の鎮魂供養もなされないままになっていたことでしょう。それに農民の至宝とも言われた牛馬が多く死滅し、田畑を荒らす虫害も著しかったのでしょう。その撲滅祈願と鎮魂供養を兼ねて神楽踊りが奉納されたと思われます。八月十五日、萩原・城之堀・呉地・中溝・出来庭・初神の六地区が揃って次々に境内で踊るのです。

この踊りは、六尺棒と軍配を手にしたニワカと肩車に乗った少年のドウトリを先頭に踊りながら入場します。大太鼓を中心に円陣を組むとニワカが口上を述べ棒術の演技があります。そして、「だし」と「かえし」の二手に別れた踊り子が、中世風の小唄を組歌に仕立て一句ずつ繰り返し唱いつつ踊ります。風流踊りにおいての側踊りと言ってもよく、手踊りの華麗さはありませんが、優雅で深い趣があります。

棒術の演技

現在の神楽踊り

この神楽踊りがどうして男踊りなのか、なぜ山伏の杖使い口上があるのか、多くの謎に包まれていますが、これとよく似た神楽踊りに「南条踊り」「火の山踊り」などがあり、いずれも所説が同じです。毛利元就の次男で新庄日の山の城主であった吉川元春が南条元続の城内に踊り子の扮装をして忍び込み、油断をする隙に踊り子が抜刀して城を攻略したと言うのです。だから、この二つの踊りも男踊りで山伏も出てきますし、この踊りが戦いの再現になっています。

熊野の神楽踊りもこの所伝との関わりがあるかも知れません。

西光寺の象の彫刻門

この寺は慶長三年（一五九八）開基　祐浄によって建立されました。この寺には「糸引名号略縁起」が残っています。それには次のようなことが記述されています。

摂津の国に宮の守神社があり、そこに目玉主計と言う人がいた。この人は仏教の話が大嫌いであり地獄極楽などあるものかと、次々に生き物を殺していた。ある時、大きな魚を釣り上げ刺身にして、酒を飲んでいると、猫がそれを盗み食いしてしまった。彼は腹を立て傍にあった包丁を猫目がけて投げつけた。猫はあえない最期をとげた。それから後に彼の娘が猫のように泣き叫ぶようになった。彼は自分の犯した罪の深さに慄いた。彼は連如上人の許に行き罪の許しを乞うた。上人は庭前の蓮の糸をとって、手先に巻き上げ名号をし染筆された。それを目玉主計親子が拝むと娘の病もぴったりと止まった。

この糸引名号がこの寺にあると言われている。この名号略縁起は、織田信長と本願寺が石山合戦（一五七三）をした時に、戦意を高めるために、蓮如上人の名号を下付したものと言われています。この名号によって西光寺が石山合戦になんらかの関わりを持っていた証になります。

文化度国郡志（一八一五）によりますと、

西本願寺派広島円竜寺末寺　玉泉山　西光寺本尊阿弥陀如来　本堂庫裏　鐘楼鐘名　安芸郡海田住　植木源兵衛藤原直昌作　開基　釈祐浄

寛永十年本山より木仏・寺号免許

となっています。

西光寺

西光寺は天明年間（一七八一～八九）と昭和十一年（一九三六）の二回の火災によって貴重な古文書や由緒ある鐘楼・多くの彫刻・絵画を焼失してしまいました。しかし、婦徳高等女学校の卒業生や、檀家信者の喜捨によってたちまち再建の費用が集まったと言われています。本堂前の象の彫刻のある門は、今にも飛び出しそうな勢いがあります。象は釈迦の前世の姿と言われインドでは崇拝の的になっていますが、象の彫刻は釈迦との出会いを予告する場所にあって独自な仏教的雰囲気を醸し出します。寺全体の構造が美しく荘厳な感じを与えます。

涙岩

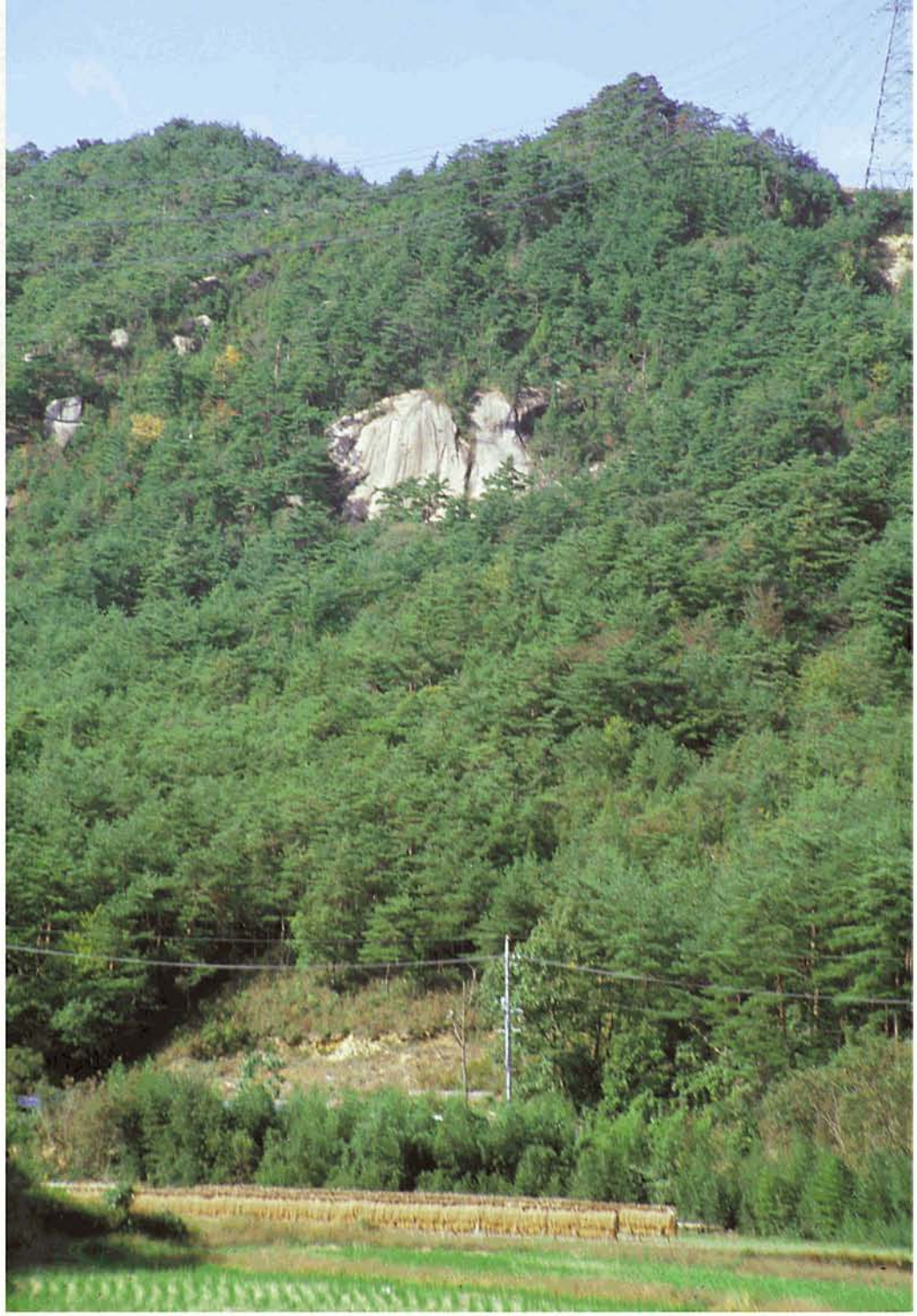
涙岩

文政八年（一八二五）浅野藩の編成した「芸藩通史」の中に「涙岩」のことが書かれています。「熊野村山中にあり、その質、黒色、白文六行ありて、涙痕のごとし」とあります。この岩については、昔からの悲しい伝説が残されています。

戦いに破れた武士は土地を捨てて、この山中に住むようになりました。この落ち武者の子孫たちは、麓の川から苦労して水を汲み上げなければなりませんでした。権次は体が弱く、その仕事は無理でしたが無理矢理に働かされ岩の上で涙を出していました。いつの間にか権次の姿は消えて岩の隙間から水が流れ出したのです。

それからというもの、この岩の隙間の水は絶え間なく流れだすようになったと言われています。この岩間から流れ出る水を「あれは権次の涙じゃ」と言って、その岩を「なみだ岩」と名付けたと言われています。

この伝説は戦いの惨めさや悲しさを権次の涙で現しているとも言えましょう。熊野町に残る古文書によれば、少なくともたびたびは戦場になっています。一つは南北朝末期（一三七一）に逃げ延びてきた武士の一団が山中にたてこもったとの話がありますし、大永七年（一五二七）熊野要害切り落としの激しい戦いもあります。また天文二十三年（一五五四）嵩山城の戦いで菅田豊後守が滅亡したことも書かれています。このような戦いでは多くの人々が傷つき討ち死にして、悲惨なあとがいたるところに残ります。「涙岩」はその歴史を刻んでいる岩と言えるでしょう。



磨崖仏

ゆるぎ岩

ゆるぎ岩と磨崖仏

江戸時代の書物「芸藩通史」には安芸国の古跡・名勝地の紹介が記載されています。その中に「ゆるぎ石一つは熊野村山中にあり、幅五尺、長さ七尺、一つは矢野村山中にあり、長さ八尺、幅四尺、皆一夫の力にて揺るがすべし。」と書かれています。

この巨岩は微妙なバランスで重なっている岩です。この岩には伝説が語られています。今からおよそ一四〇年ほど前のことです。

城山の麓に住んでいた年寄が重い病気に罹り苦しんでいましたが、どんなに良く効く漢方薬を飲んでも病気は治りません。そこで三日三晩、一心に「ゆるぎ岩」に祈りを続けました。すると、不思議なことに苦しんでいた病気がすっかり治ってしまいました。その噂が村中に広がり、人々の信仰を集め観音堂が建てられました。

この観音堂由来記には慶応元年（一八六五）に、水木嘉右衛門が病床の際、夢に現われた観世音菩薩を現在の「ゆるぎ岩」に安置し、病気が全快したと書かれています。磨崖仏は、この水木嘉右衛門の発願で明治元年（一八六八）から毎年一体ずつ刻まれていきました。西国三十三観音にならって三十三体にしましたが、さらに三体を加えて三十六体の磨崖仏が大正初期に完成しました。まわりの静寂な風景と苔生した磨崖仏の表情は、おだやかで微笑みを浮かべ信仰の地にふさわしい雰囲気を醸し出しています。

今も多くの参拝者があり、毎年の祭礼はにぎやかです。ゆるぎ岩の付近は巨石が累々と横たわり古木があたりに神秘さを漂わせています。ゆるぎ岩、磨崖仏、観音堂とそれぞれが調和して熊野町の名勝地として人々に紹介したい場所でもあります。この地は熊野町指定重要文化財の第四号指定を受けています。

熊野筆の文化

孫井（居）田庄次郎の子、正三郎らの寄進による玉垣

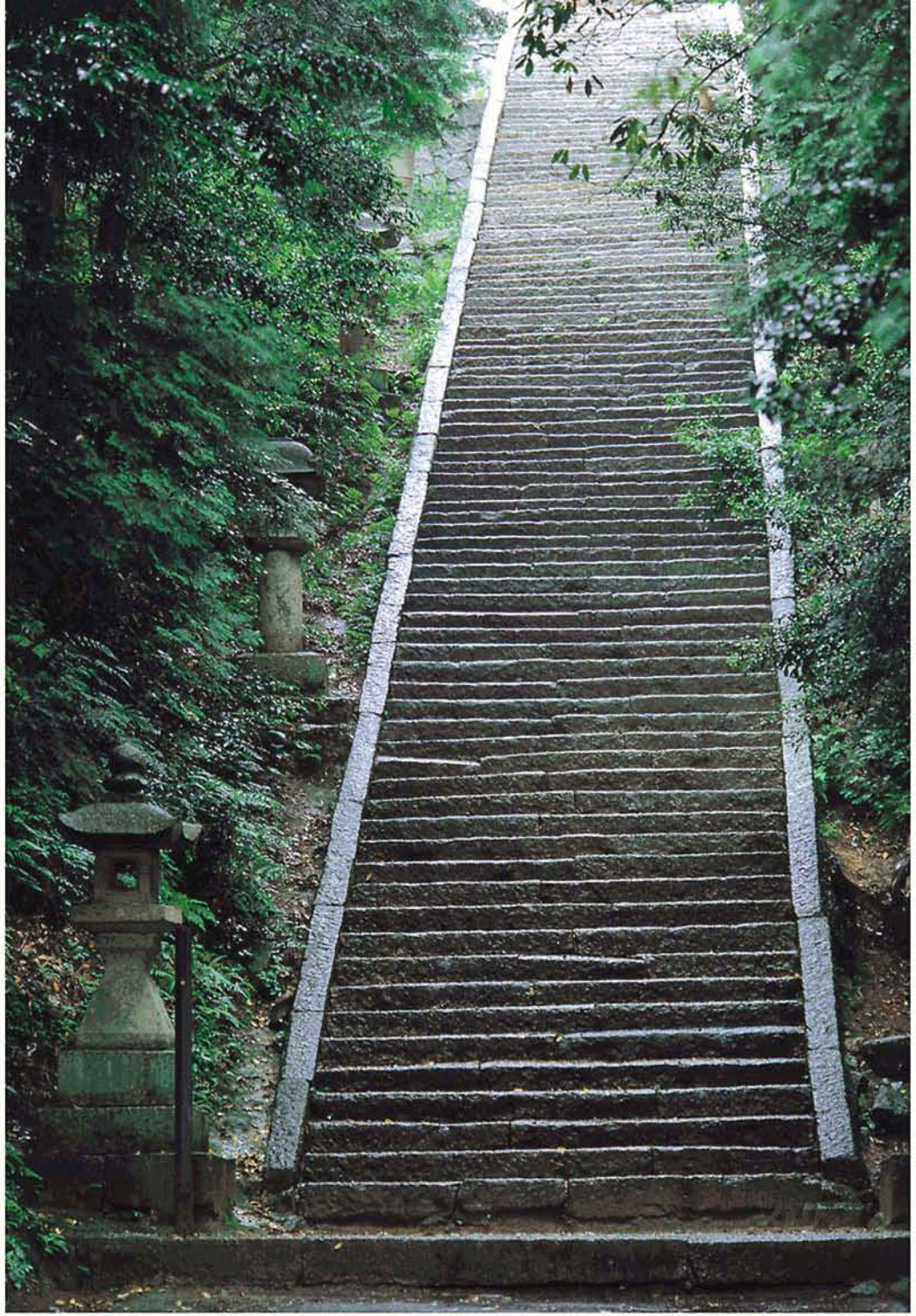
大宮八幡宮の石段・玉垣

江戸時代後半の安政年間（一八五四～一八六〇）は、芸州筆の生産も確実に伸び熊野の地にも大商人が出てきた時期です。その代表が孫井田・世良（住屋）などです。これらの豪商は、村の中で神社の再建や寺院の修復があるたびに多大な寄付・寄進をしました。榊山神社の九十九段の石段は孫井田才兵衛の寄進ですし、玉垣は弟の正三郎の奉納それに渡辺勘三郎の寄進です。

この榊山神社の参道に並ぶ石灯篭や玉垣の中には、奈良・秋田屋小兵衛、大坂・楠本屋利兵衛、有馬・小田原屋庄三郎、有馬・江戸屋久兵衛など近畿地方の豪商の名前が書き込まれています。毛筆の商売の範囲がどんなに広く行われていたかを知る手がかりになります。この玉垣の傍に説明板があり、建築年代は安政六年（一八五九）であり、刻銘が明確な石柱は珍しく文化財としても価値があると言われています。

文化八年（一八一一）呉地庭の孫井田庄次郎（また名前、中島才兵衛）は大宮八幡宮の九十九段の石段を寄進して、商人の心意気を示しましたが、この石段の建造費用を現在の費用に換算してみますと約二千万円に近いと専門家は言います。いかに多くの財力を貯えていたかが分かります。彼は天保四・五年（一八三三～一八三四）頃、広島より吉田清蔵を伴い帰り毛筆製造を起こし、ついで若島常太郎、胤森仁三郎を奈良に行かせ毛筆製造の伝習を受け、帰村して本業を営ませたと言われています。彼は嘉永二年（一八四九）御分高五十石の給庄屋に任命されています。記録によれば、才兵衛は孫井田庄次郎とも書き記されています。

この時代のもう一人の豪商住屋長兵衛の名前は出てきませんが、油株を取得して大きな取引をしていますし、広島藩の墨売捌取次筆頭として活躍しています。このように熊野の商人は大きく産業発展のために尽くしています。



孫井（居）田の「亀趺墓」

郷土館の看板（山本空外師・揮毫）

郷土館の看板

郷土館は昭和五十三年（一九七八）に開館されました。以前は尺田酒醸場でしたが、昭和五十年（一九七五）に町が購入し、改築整備したあとに熊野町郷土館として開館したのです。郷土館は他地域で見られるような農具、民具、生活用具などを展示しています。けれども、その最も大きな部分は筆関係の展示室に用いています。

筆関係の展示としては、「各種の毛筆」羊毛筆・鳥毛筆・わら筆それに「画筆」「化粧筆」「毛筆の原料」「筆製筆用具」「筆問屋・筆行商用具」など一階に展示されています。

また、一階の蔵の中には生活・生産用品が展示されています。そこには祖先が熊野の風土の中で創りだした生活のにおいのする民具や、農耕具が陳列されています。なお、考古関係の遺蹟の石器や矢じり土器類などを並べています。

二階には書道関係の「書作品」「書道具」「書道手本」それに古文書・古書などを展示しています。郷土に伝わる寺・神社・庄屋その他に民家に伝わる古書なども陳列してあります。

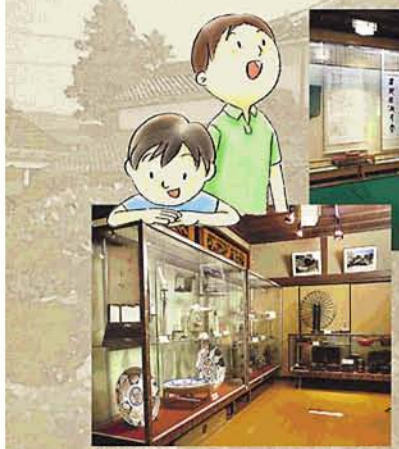
この郷土館の看板は山本空外師の揮毫によるものです。空外は、広島大学名誉教授で浄土宗僧侶でした。著書には「哲学体系構成の二途」「無二的人間形成」でなどがあり、ラテン語、サンスクリット語などを原典で研究しその道の第一人者と評価されました。彼は広島文理大学の助教授として就任しましたが、原爆で多くの学生を失わせたことに深く心を痛め四十三歳で得度。無住だった浄土宗隆法寺に隠遁します。それから六年山寺の生活の中で「山西窯」の指導を通じて青年たちに、「無二的人間」と名付けた生き方を教えた。この人の書の彫刻が郷土館の看板になっています。

この郷土館の中には、江戸時代後期に活躍した三大能筆家の貴名海屋の愛蔵の巻筆もあります。海屋はわが国の書道史の中で空海以来の能筆家と称されるようになりました。雅号を度々改めて「菘翁」とも言いました。その他に明治初期の筆問屋の嘆願書など興味の尽きない品物が多く展示されています。

筆問屋

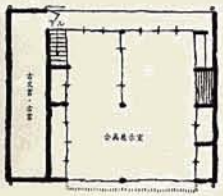
祭りコーナー

彼岸船（模型）

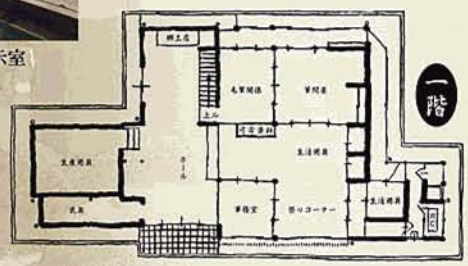


生活用具

企画展示室

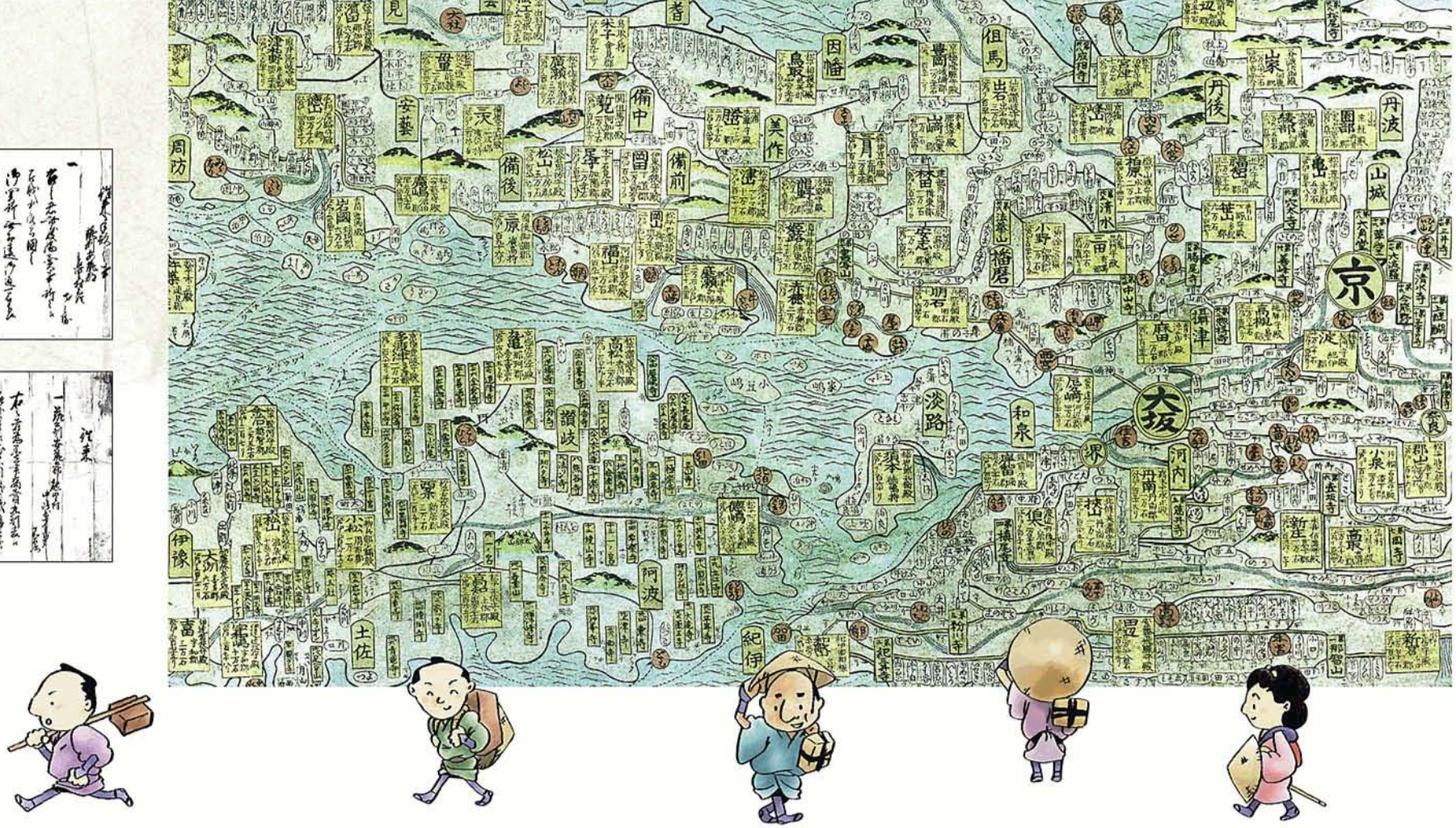


二階



一階

古文書の写し



古文書（通行手形）

筆・墨の行商がいつから熊野村で始まったのか、確かな記録は現在のところ分かっていません。けれども天保時代の豪商　住屋長兵衛の生涯や、孫井田才兵衛の生涯を調べることによって新しいことが、少しずつ分かってきました。その中でも住屋長兵衛の書き残した「旧記帳」は貴重な資料として解明する必要があります。

彼は天明九年（一七八〇）安芸国熊野村に生まれています。十一才で寺子屋に入り手習いをしています。十四才の時から行商の見習いをして、十七才の時には独立して商売を始めています。その間十五才の時には、九州豊後（大分県）へ墨・筆商の父親に付いて行き商売をしています。当時父親は四十五才ですから、すでに天明年間には、墨・筆の行商は行われていたと推測してもおかしくはありません。熊野筆の歴史の中では「寛政十年（一七九八）住屋長兵衛が大坂、有馬、奈良まで行き仕入して、今年までに銀一貫匁余りできた」と記録しているところから掲載しました。

このように墨・筆の行商はだんだん盛んとなっていきますが、天保二年（一八三一）に熊野村　貞右衛門（改　長兵衛）貞治、勘三郎の三人の連名で、筆・墨の行商株の許可を割庄屋に願い出ています。願株といい江戸時代末期に商売の発展に大きな役割をはたしました。「御触状写し帳」に掲載されているのですが、許可されたかどうかは確認できません。

このようにして、行商人の経営力が増すにつれ、通行手形・往来手形はますます重要になってきました。当時、熊野で行商人は八十名です。この人たちの交通手形の中で孫井田才兵衛の弟の嘉右衛門と才兵衛の「往来手形之事」の古文書が見つかりました。写真はその古文書の写しです。

この交通手形によって、全国各地に筆・墨を行商していたのを知る時、心打たれるものがあるでしょう。

筆の道具と技（伝統工芸士）

「伝統工芸士」という制度ができたのは昭和五十年度（一九七六）です。福垣内茂さんは、その年度に認定された熊野の五人の中の一人です。伝統的工芸品産業功労者褒章や勲六等単光旭日章も受賞しています。福垣内さんは大正九年生れで農家の三男です。尋常高等小学校卒業の十四才から筆司について筆の修業をしています。兄を戦争で失い両親も早く亡くしました。彼は軍役に従事しましたが生きて終戦を迎えることができました。一家を支えねばなりません。戦後の苦しさの中でわずかな田畑を耕し、炭売りなどの行商をして生活費を稼いでいました。

世の中が落ちつくと筆の需要が増え、筆づくりに力を注ぐことができるようになりました。原料の毛を自分で買い穂首を作って筆の販売業者（問屋）に買ってもらうのです。思うような値段で買ってもらえず何軒も回ることもありました。しかし腕・技術が高まると逆に販売業者からの注文が増えてきたのです。販売業者には筆を使う書家からの「こんな筆を作って欲しい」という注文があります。販売業者は筆職人を選択し指名します。これを仲裁といいます。福垣内さんを仲裁で指名した書家の中には児童・生徒用の手本で有名な広島大学の井上桂園という先生もいました。

福垣内さんの道具をみせてもらいました。茂さんは手板を三枚もっています。手板は毛をそろえるために寄せる板なのです。その中で愛用の手板は十一×二十二センチメートルのもので五十年以上も使っています。光沢があり手板の周辺は使いこまれて丸みを帯びています。材は桜の木です。この手板は毛を寄せても板にくい込まないのです。毛先を痛めない柔らかさも必要ですから金属製では困るのです。毛がなじむといった方がよいかもしれません。

ハンサシという道具もあります。長さ十五センチメートル前後の小刀のようなものです。しかし切れ味は必要がないのです。毛もみ用と台仕事用がありますが毛もみ用は逆毛をとる場合に使います。台仕事用はもつれをほどき悪い毛をとったりします。ハンサシの背は毛をのばすのに、歯は悪い毛をより分けるのに使います。料理人が「包丁一本」といいますが筆司も「ハンサシ一本」といってもよいでしょう。よい毛を傷つけることなく悪い毛のひっかかりで探し当てるのですから刃先は微妙な角度が求められます。

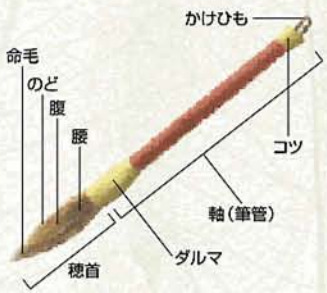
洋銀の金櫛があります。福垣内さんは櫛目の違う十一本の櫛をもっています。無駄な毛を抜き取る、毛を広げていく、もつれを解く、混ぜていくなど用途により使い分けをします。同じ毛であってもはじめは目の荒いものから極く細かい櫛へと段階を踏みます。毛の種類にもよります。こうした道具は購入するのですが、使いこなして自分の道具にするのです。先ほどの手板も、二枚は愛用のものほど気に入られていなかったようです。

何といっても技術がものいう世界です。もっとも難しいところは選毛にあると福垣内さんはいいます。よい毛を選びよい毛をそろえることが筆つくりの命なのです。綿毛は櫛で十分取り除きます。こうして綿毛のないものだけを選び取ります。先から根元まで光沢のあるもの、先にゆくほど細くなっているものを選びそろえるのです。盆混ぜ台で毛を拡げたり束ねたりします。束ねた毛を根元でそろえたり、毛先でそろえたりします。毛に傷がつかないように毛の広げ方やそろえ方にもいたわりの心が必要なのです。

福垣内さんの仕事を見ると手のひらにのせた一握りの毛をひとつまみずつ何回も何回も抜きながら重ねています。一握りの毛を平目竹で押さえ、毛の引っかかりを探して抜き出す作業もあります。手にのせた毛を手板にあて毛先の方に寄せます。寄せ金に毛をのせて手板にあてて先の方に毛を寄せます。それは同時に毛選びの過程でもあるのです。目と手触りの感覚で悪い毛を探します。手のあてや親指の腹で逆毛や先のない毛を探します。考えるのではなく直感ですから注意力と経験がものをいいます。悪い毛はハンサシと親指と人差し指を巧みに使い分けて抜き取ります。毛選びはどの段階でも行っていきます。

穂首作り　選毛・毛組

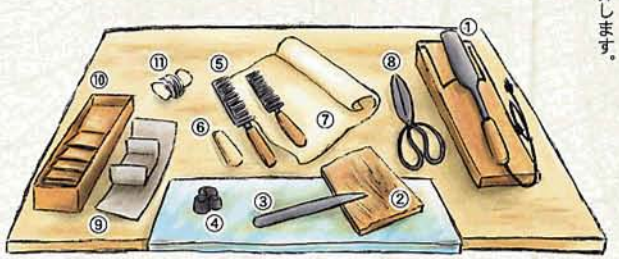
筆の材料



一本の筆は、大きく分けて墨を含ませる穂首部分と手に持つ軸部分に分けられます。穂首の材料は主に馬、鹿、山羊、たぬき、イタチなど動物の毛ですが、これらは中国や北米などから輸入しています。軸の材料は主に竹や木です。これは岡山県、兵庫県から仕入れたり、中国、韓国などから輸入しています。

筆づくりの道具

筆づくりに使われる道具はその作業工程により様々な種類の道具が使われます。ここでは「台仕事道具」と呼ばれるものを紹介します。



① 焼ごて　② 手板　③ ハンサシ　④ コマ　⑤ 金櫛（平目櫛）　⑥ 平目竹
⑦ 鹿皮　⑧ ハサミ　⑨ 角金・寄せ金　⑩ 寸木　⑪ 麻糸

穂首作り　衣毛（上毛）巻き

穂首の形作りも難しいといいます。見た目の美しさだけでなく、いつまでも形を崩さないこと、しなやかさを持ち続けることが求められています。一の毛、二の毛といった長さを変えて寸切りした毛の配分や混ぜ方など、筆の種類・形によって変えていかねばなりません。経験により決めるのですが何回も形にしては修正を加えていくのです。納得のいくまで繰り返します。注文主の厳しい条件も気になるところです。

難しいところは他にも色々とあります。手を抜くと良い筆はできません。一歩一歩階段を上るように仕事をするのです。筆つくりは一生勉強であり、筆職人として生きていくためには器用さと研究心そして時間を忘れるほどの熱心さが大切だといいます。「穂首」作りを続けて六十年余り、「食べるためにやってきた。お陰で一家を支え、子どもを育てることができた。」と最初に感謝のことばが出てきました。思うような仕事ができ、高い値段で穂首が売れ、お客に喜んでもらえたときが何よりもうれしかったとも言っています。「毛は一本一本個性があり、作るたびに新鮮です。」という福垣内さんのことばは人のあり方や生きることの意味を言い当てているようです。熊野ではこうした地道な生き方が文化・風土という水脈となって生きているのではないでしょうか。

伝統工芸士認定者

（敬称略）

▼昭和五十年度（昭和五十一年三月十六日付）
（現　聴）上馬場　正生（知白）　福垣内　茂（白玄）
（死亡者）実森　盛登（得全）　赤翼　萬寿彦（洞水）
　　徳田　信雄

▼昭和五十一年度（昭和五十一年十二月十五日付）
（現　聴）なし
（辞任者）蓮池　寿三（昭和五年三月三十一日）
　　今城　善秋（昭和十年三月二十四日）
（死亡者）植松　静利　小鳥田　松雄（紫水）
　　藤本　勝三

▼昭和五十四年度（昭和五十五年二月一日付）
（現　聴）石井　光二（光舟）
（辞任者）平成十年三月二十四日付
　　番匠谷　定（定秀）　川本　敏明（俊斎）
　　女夫池　芳男（三慮）
（死亡者）梶谷　哲美（玉扇）　蓮池　義明（明星）
　　上馬場　敏行（行真）

▼昭和五十六年度（昭和五十六年十二月十一日付）
（現　聴）中川　次雄（光峰）　中川　敏朗（聖峰）
　　雄井　佐千江（真光）

▼昭和六十三年度（昭和六十三年十二月十六日付）
（現　聴）山井　信雄（竹玄）

▼平成五年度（平成六年二月二十五日付）
（現　聴）荒谷　幸三（城舟）　赤翼　剛（洞水）
　　大久保　武　伊原木　嘉世子（嘉永）
　　仁井本　不二男（誠研）　藤川　岸登（玉水）
　　南崎　盛靭（靭斎）

▼平成十一年度（平成十二年二月二十五日付）
（現　聴）大段　明弘（明翠）　実森　康宏（得全）
　　南部　豊彦（豊栄）

平成十四年六月現在

筆作りの様子

工場制手工業（マニュファクチュア）

工業の発達の歴史には家内工業から問屋制家内工業、そして工場制手工業、更には工場制機械工業の段階があります。家内工業とは自宅内で家族が道具を使って手作業でもの作りをする工業です。作る・売る人が同じ段階から作る人、売る人が分かれてくるようになります。問屋制家内工業は家内工業という点では同じですが問屋と結びついて行われるものです。問屋は材料などを提供し、またできた製品を引き取るのです。問屋は作業者に給金（賃金）を払います。工場制手工業は道具を使っての手工業という点では同じですが工場という一つの建物の中で行われるものです。材料の配布や製品の回収が必要ではなくなります。工場制機械工業は動力を使った機械を使用するのです。

熊野の筆産業は歴史的にどのように位置づけられるのでしょうか。明治五年（一八七二）にスポットを当ててみましょう。「熊野村筆墨商高」（庄屋祐四郎）によると、五年の熊野村の筆職人は老若男女合わせて一二〇人です。筆や墨の商人もかなりいたようです。商い額は筆四千両、墨三千両です。当時は変革期でのちに一両が一円になります。庄屋に当たる副戸長の月給が十二両だった頃です。筆のうち二千両は地元の熊野で作られた製品です。一二〇人の職人がつくっていたのです。残り半分の二千両と墨三千両は京都・大坂・奈良（上方）から仕入れたものによるのです。この他に熊野の商人が上方から直接仕入れて中国・四国・九州に売りに出た人の商い分があります。こうした面からみると熊野商人の商い額は筆だけでも六千両にも七千両にもなっていたでしょう。職人と商人の力関係は大方の場合、商人（販売者）の方が強いのです。職人は商人の注文によって筆を作っているからです。筆を買い集め、小売商に卸す商人を問屋といいます。昭和五十年代の「広島通産モデル調査」では熊野筆事業者の創業期を江戸時代とするものが三でそれぞれ従業者規模は五十一～一〇〇人、六～二十人、五人以下だそうです。

明治五年の職人数は一二〇人だったので妥当な数値といえるでしょう。明治五年頃でも問屋制家内工業を営むのはこの事業所三だったと考えられます。毛筆元祖「佐々木為次先生碑」のそばに向殿嘉右衛門が建てた芳名碑があり、その中に熊野筆の毛筆問屋元祖として向殿四郎兵衛の名があります。彼の問屋もその一つだったのです。明治も中ごろになると事業者数は急速に増えていきます。

ところで、この向殿四郎兵衛は世良太三郎と連名で明治五年、「筆職人長屋建設について」の願い状を第三大区の御用所に提出しています。当時職人はちりぢりバラバラに居住していました。職人を一ヶ所に集めることによって職人は仕草（原材料）を融通しあうことができるし互いに励み合い下手も上手になります。商人もあちこちで買い入れるのではなく近くで買いやすくなります。一戸建てを四軒、二戸建てを六軒、三戸建てを六軒、四戸建てを一軒、六戸建てを一軒合わせて四十四戸建てようというのです。必要な材木は二人の私有林三ヶ所から九十本、材木店からの購入、あり合わせの古木を利用するとしています。場所は道路沿いの荷物運送の便利な場所にし、完成したら貸家にするという計画です。このようにすれば貧しい村も豊かな村になるので許可してくださいという内容なのです。多くの長屋を一ヶ所につくり多くの職人（労働者）を集めようとすることは工場の建設にあたります。この意味で二名の願い主は資本家といっていいかも知しれません。もしこのことが実現していたならば工場制手工業の段階といえるでしょう。しかし厳密にいうと工場制手工業でいう「工場」ならば筆の生産工程を単純な作業に分解（分業）し、協力（協業）するしくみが必要なのです。明治五年の熊野の筆産業は、「筆職人長屋」が実現していたとしてもそうしたことがなければ問屋制家内工業の段階だったのです。

今でも筆産業は家内工業が多く見られ手工業が主流です。工場制手工業はいつ成立したのでしょう。筆の生産工程は①選毛　②毛組み　③毛揉み　④寸切り　⑤混毛　⑥芯立て　⑦衣毛巻き　⑧糸締め　⑨管込み　⑩糊固め　⑪キャップかけ　⑫銘彫刻　⑬包装と分けられます。①から⑧までは穂首司が、⑨を管込司が、⑩・⑪を糊入司（仕上司）が、⑫を彫刻司がしています。こうした大きく分けた分業と協業を取り入れた工場制を取り入れた筆の事業所を今では数多くみることができるようになりました。工場制手工業なのです。しかし全体の工程をみると穂首の製作部門の占める割合が高いといえます。そこは分業がしにくいところです。どこまでを分業というか、いつ頃から分業が行われてきたかを正確にいうことは難しいところです。

筆のいろいろ（上から毛筆・画筆・化粧筆）

前列左から和田虎吉、藤田徳行、尺田徳太郎、工田旧七
後列左から城本穣一、藤林房吉、神鳥林右衛門の諸氏
（写真提供：尺田徳太郎氏）

熊野七筆会

明治時代末期の「芸備日日新聞」の記事に、熊野七筆会のことが二回出ています。一回目は明治四十一年（一九〇八）のことで、七人の青年達が毛筆業の発展を図るため熊野七筆会を立ち上げたこと、最初の事業は産業を奨励し新しい知識を村民にもってもらうため新聞雑誌縦覧所を中溝に新設したことです。新聞などには「芸備日々、大阪毎日、大阪時事、東京報知、万朝報、筆世界新報、東京文具商報、関西時報、実業雑誌の少年に適する雑誌十数種」がありました。芸備日日は明治二十一年（一八八八）の発刊でこの時期には県下で中国新聞と争う地方紙でした。大阪毎日も同年の発刊で今の毎日新聞であり、東京報知は読売新聞の前身です。万朝報は二十五年（一八九二）の発刊で当時もっとも進歩的な新聞だったのです。筆世界新報や東京文具商報などは業界紙です。これらを七人の拠出金で毎月取り寄せていますが村民から寄贈された書籍もありました。しかもそれらが整然と陳列されているのですから熊野村に図書室をつくったことになります。開設当初の五月の入場者は二千人余り、一日平均にするとおよそ七十人です。榊山神社の春の祭日には無料で入場できますと印刷した広告を出していますから、それ以外の日は若干の入場料を取っていたことになります。二回目は四十二年の記事です。四月四日に神鳥若次郎氏宅において毛筆の改善を目的にして毛筆製造の研究をするために各業者の意見を聞く会を開いたという記事です。熊野村での研究会とも講演会ともいえるものです。

七筆会の七人は尺田徳太郎、和田虎吉、神鳥林右衛門、工田旧七、城本穣一、藤田徳行、藤林房吉です。事務所は林右衛門宅の神林堂（熊野三三三二番地）に設置していました。結成の理由は当時の熊野筆の生産や景気の状況から次のようにいえるでしょう。明治中期から生産が盛んになり三十年代末期には最高を示すのですが、四十年代に入ると伸び悩むのです。明治四十一年と四十二年の横山製筆合名会社の営業報告書が残っており、それによると売上代金がそれぞれの年に一四六〇円余、九七四円余で純利益は八〇〇円、五十七円となっています。四十二年の諸経費の割合は職工賃金が五十パーセント、材料費が三十七パーセント、営業費が七パーセントで先の純利益五十七円は六パーセント弱にしか当たらないのです。その原因のひとつに、それまでの練り混ぜ法から熊野で開発された盆混ぜ法に移行する過渡期だったことがあるのです。練り混ぜ法や盆混ぜ法を使う工程は筆づくりの核心部分なのです。盆混ぜ法は練り混ぜ法に比べて数倍もの生産性が高いのですが、そのため大量生産によって不良品ができたこと、過当競争による信用失墜があったことが考えられます。若い筆事業後継者が危機を敏感に感じ取ったと考えられます。この会のリーダーの一人尺田徳太郎は四十一年には二十才だったのです。

七筆会は新聞雑誌縦覧所をつくったこと、熊野特産の毛筆の改善に尽くしたことなどで、明治四十五年安芸郡斯民会（会長古田頼己）より表彰され金壱封を贈呈されています。斯民会は道徳の教化、産業の発達、地方自治の興隆に貢献した人や団体を表彰したり、講演会や講習会を通して会の目標を達成しようとしました。会長は安芸郡の郡長です。

大正三年（一九一四）に「毛筆奨励会」が伊藤明三会長ほか四十四名でつくられます。五年には神鳥林右衛門を会長として三十名を集める筆の生産者と筆の販売者のための「商工会」ができ、同時に筆の職工と職工の面倒をみようとする使用者でつくる「工親会」が横山万次郎外六十名で結成されます。こうした会が結集し大正十五年に発足したのが「熊野商工会」なのです。この会の初代会長は尺田徳太郎、二代が神鳥林右衛門、三代が城本穣一です。かっての「七筆会」の三人です。図書室の創設や研究会の開設、筆業者・商工業者の結集と熊野七筆会の果たした役割は大きいものがありました。